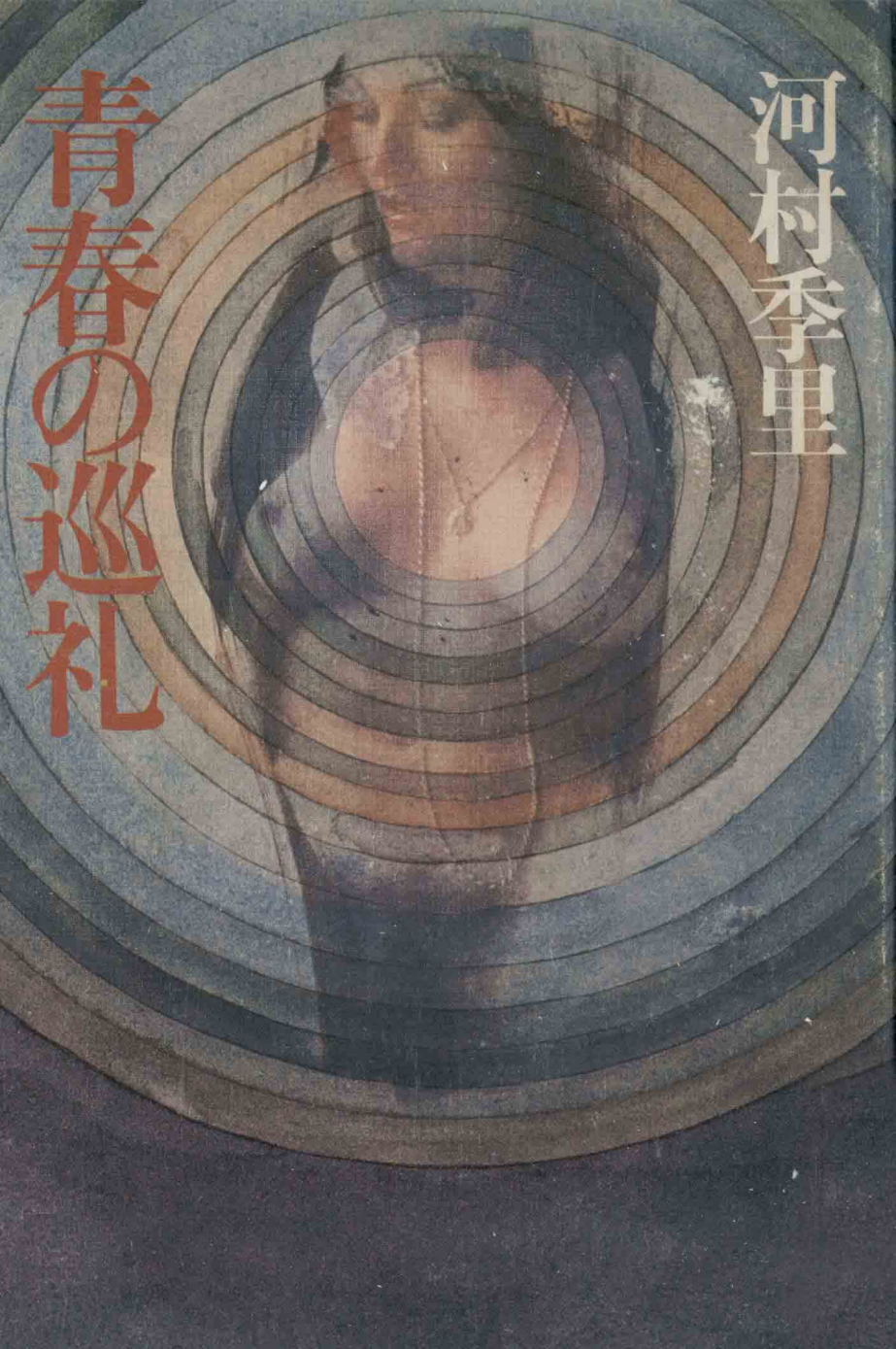


河村季里

青春の巡礼



青春の巡礼

河村季里

角川書店



青春の巡礼

昭和55年11月28日 初版発行
昭和56年 2 月10日 再版発行

著 者 河村季里

発行者 角川春樹

発行所 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3 郵便番号 102

電話（東京）(265)7111〈大代表〉 振替 東京3-195208

旭印刷・大口製本

落丁・乱丁本はお取替えいたします

©Printed in Japan

0093-872297-0946(0)

青春の巡礼

装画・池田満寿夫

表紙絵——Venus in Circles, 1974

裏表紙——Death in a Room, 1974

I

ジェット機が、高度を下けている。翼をかすめて、片雲が吹きすぎた。

機体が左へ旋回し、大きく傾くと、水田地帯の豊潤な緑が窓へ迫りあがってきた。緑のなかに、水の色より少し濃い褐色の、道らしい筋が、細く長く伸びている。道を結んで島のように、濃緑の樹木のかたまりがあり、家の屋根が見える。

旋回が終わり、機体が水平に戻り始めると、水田は窓をゆっくりと下降した。上部から、再び空が現われて、地平線が、眼の高さになった。空と地上とを分けて、遠く密林がひろがっている。

この陸地はスペインまで続いている、と思い、七年前に歩いた石畳の小さな街の情景を甦らせた。細い路地を歩いているKと私の後ろ姿が、眼に浮かんだ。

Kが、座席のポケットをごそごそやって、読まずにはうりこんであった文庫本を取

り出し、足もとのズックのバッグにおさめた。禁煙のサインが点いた。気圧の変化でおかしくなった耳が、あくびをすると抜けた。眠らなかったな、と思う。

数日、ほとんど眠っていない。昨夜は一睡もしていない。眠るということが他人事のようにだった。

「眠ったか」

と訊くと、Kは黙って薄く笑い、首を振った。

大阪空港を離陸したとき、Kと私は、日本を脱け出した、これで誰も追ってはこない、と思い、安堵して顔を見合わせた。その瞬間から、私たちは眠ってもよかったのだ。

車輪が着地し、機体が風音を巻いた。

「時差は、どのくらい」

Kが、バッグから男物の腕時計を出した。

「二時間」

私は答えたが、Kは七時四〇分を指した時計の針をすぐには戻そうとせず、放心した顔つきで瞞めた。

七時四〇分——とうに幕はあがっている。東京では、Kのいない『吸血鬼』の舞台が、進行している。Kが、初日から一四日目で突然行方不明になり、それから三日。たぶん代役の女優が、Kの純白の衣裳を着、吸血鬼の恋人役を演じている——

バンコクの滑走路で、座席に身を沈めたKの脳裏でもまた、おそらく舞台が進行している。あるいは、Kの肉体は、動かぬまま可憐な少女を演じ、せりふは喉もとでせめぎあっているのかもわからない。

私は千秋楽に観る予定だった。「まだだめよ、楽^どだったらしはましになっていると思うの」Kがそう言ったときの笑顔が、私の頭から離れない。

観ていなくてよかった、と思う。

飛行機は滑走路を外れゆるゆると動いている。陽はまだ午後ものだ。

Kは時計の針を戻し、眼を瞑^{つむ}った。

二日前になる。

井^いの頭^{かしこ}通りに面した富^{とみ}ヶ谷^やの小さなマンションの部屋で、

「劇場へはゆかない、これっきり舞台はやめる」

と、Kが自分にいきかせるように言ったとき、私のテーブルのうえにある目覚時計は、午前一一時四〇分を指していた。開演は、午後六時だった。

「眠りたい」

とKは言った。

その日部屋へ戻ってきたのは、朝の六時を過ぎていた。前日は午前一一時だった。まる二昼夜、Kは一睡もしていない――

「眠らせて欲しい」

私は押入れから布団と毛布を出した。一枚の布団に、枕を二つ出した。昨夜は私も眠っていなかったが、眠られると思ったわけではない。眠るKに寄り添っていたという気持が動いた。思えば、Kと暮らし始めて四年になろうとしていたが、ひとつ布団で眠るのは初めてのことだった。

「一時には起きなければな。それから、行動開始だ」

「開演時間には東京を出ていたい」

Kがシーツの端をまるめこみながら弛緩^{しかん}した口吻^{くちふん}で言った。

Kが、恋人役の男と寝たと知ったとき、最初に、憤怒とともにこみあげてきたのは、なぜ、という齒軋^{はざし}りするような思いだった。

二人で暮らし始めて東京に居た一年と数か月の間、Kが女優として仕事をする現場のスタッフが、仕事を食^はみ出して男として関わるうとし、結果、Kと私の間に介入してきたことが幾度かあった。そのたびにKと私は、崩れかけた橋を危うく渡るような局面を重ねてきた。その後Kは一旦女優をやめ、私たちは飛驒^{ひだ}の山中で暮らした。今度の舞台で、Kは女優として新しく出なおそうとしていた。二人の関係がぐらつくようなことは起こり得ないと私は思いこんでいた。山中の二年間は、その地固めのはずだった。それが飛驒を出て三か月、初めての仕事でたちまち地割れを生じた。そう思った。眩暈^{めまい}に似たものを覚えた。

「女優という仕事は男と寝なければ成立しないのか。三か月も保たないのか」だが、なぜという口惜しさはたちまち、自分が愚弄^{ぐろう}されたのだという口惜しさと絡み合い、私は取り乱し、逆上した。

昨日、午前一時に部屋へ戻ったKの素振りが、眼の前に鮮やかに甦った。

ドアが開き、現われ、「心配したでしょう」と言い、くるりと背を向けてドアを閉

めた。三秒間ほどのその素振りが強く、まぶたに残ったのは、不安に苛さいまれて待ち続けたせいもあるが、それよりも、Kの異常な気配を感じとっていたせいだろう。

不思議な華やきがあった。

満面に快活な笑みを浮かべ、上気していた。眼は潤んで見え、笑みとは釣り合わぬ緊張した強い光があった。身のこなしが過度に快活だった。浮き立つものを、すばやい動作で噛かみしめる、そのはざまから、濃厚なあでやかな匂においが発散した。

無言で、私は迎えた。

「帰ってきたらあなた寝てたから散歩してたのよ」
やや声高に、弾んだ調子で言った。

「ずっと」

「パッショでコーヒーを飲んだり」

「パッショに。何時ごろ」

「早くに。七時半ごろ」

にこやかに笑った。眼がきらきらしている。

「で、きょうはどうする。眠いだろう」

部屋を移ることにしていた。その日は不動産屋へいき契約しなければならなかった。

「平気。ゆきましよう、いまから」

契約をし、部屋を眺め、お茶を飲み、食事をした。活潑な身のこなしも笑みも、崩れることはなかった。劇場へ向かうべくタクシイに乗ると、窓越しに手を挙げてひらさせた。

タクシイが走り去り、消えてからも、私は立ち尽くしていた。朝五時過ぎに眼をさました私は、部屋で待つことに耐えきれず、パッシオが七時に開くのを待つて、九時近くまでカウンタアに座っていたのだ。

けさ六時に戻ると、昨日の勢いや弾みは失せ、微笑は固持しているが力はない。スタッフらと飲んでいたのと言い、「眠い」と言った。眼の下に隈が浮いている。

私の視線を避け、すうっと逃げる気配に気づいた。私から距離を隔て、一歩近づくと、ひょいと一歩身を躲す。躲すたびに、ふとすばやい動きが生きかえた。油膜のように全身をくるんだ疲労が退き、佇むとまた湧いて出た。

問い詰めた私に、Kは横顔を見せて頷いただけであった。男と寝たことも、奇怪なことに相手が誰であるかも、私が言い当てた。それが憤怒を倍加した。当り前すぎる、

と呻いた。

私が逆上すると、Kは身構え、あとずさり、部屋の隅でダンスに背を打ちつけた。

「生まれつきなのか。淫乱で尻軽な血が流れているのか。簡単な女っていうんだ、おまえみたいなのを。なんでそう簡単に股をひろげるの、どうして寝てしまうの、馬鹿野郎」

私が罵るのへ、Kは怯えた眼をみひらき、言葉にならぬ短い呻きを洩らす、口をきつく結んでしぶとく言葉をかえそうとしない。反撥は眼に顕われ、驚いたように強い視線を私に注いでは激しく顔をそむける。

私の言葉とは無関係に、苦しげに顔を歪め、長い息を吐き、力のない眼を落とす。殴りつけたい衝動があった。

Kはすばやく察知し、スカートの裾をひるがえして横ざまに逃げた。細い腰がぐいと振れ、芝居のために脱色した金色の長い髪が乱れて舞った。いつでも逃げられる体勢で、顔を斜めにして後ろへひき、喉が嘲笑うように、白い。

為損じた私は、殴ったらおしまいだと思いなおし、二メートルほどの間隔を置いてそれ以上に詰め寄ることができない。激情が頭の芯に突っ立ち、それを中心にくるく

と軀^{からだ}がまわり出すのではないかと思われる。

裏切り、とわめき、肉を食う女、と罵る。

傷ついたのは私であり、苦悩は私だけのものとはかりに、いわば安全な場所で私は吠^ほえたてていた。

そしてKは、その醜怪な独善に的確に反応し始めた。

気づくと、怯えが掃け、眺める眼に変わっていた。その底に、冷やかな私への嫌惡^{けんご}がある。私はいつそう激昂^{げきりやう}した。

「居直るんじゃないよ」

Kの眼窩^{がんか}に侮蔑^{ごべつ}が浮き、失望が湧いた。

私を見据えるようにし、

「あたしはあの人が好きなのよ」

ひくく鋭い声が、張り詰め伸び切った私の神経に、ぶすりと刺さった気がした。

「好きでもない人とそんなことしない」

それだけは譲れない自身の誠実だというように眼を光らせた。

「昔とは違うというのか」

「違うわ。あたしは、好きになったのよ」

挑みかかる姿勢になった。

だが、またしても男に遊ばれたのだ、騙されたのだという私の思いこみは、Kがどれほど男への心情を吐露したところで変わることはない。

「女の前でちらちらしながら、自分のことを好きにさせるくらい簡単なんだよ。おまえみたいな女はちよるんだよ」

「違うわ、そんなじゃないわ」

「役のなかの恋心と現実が混同していないと、はっきり言えるのか」

「あなたは、なにも知らないじゃない。勝手に想像してるだけじゃないの」

「敵も役者だろう、手練手管には長けているだろうよ。いいか、遊ばれたのはね、軀だけじゃないんだよ。おまえ」

声が掠れた。Kばかりではなく、私もまた男に遊ばれたのだという奇妙な錯覚があった。

Kの眼が反撥の光で照った。白い顔の皮膚が薄くなり、水を打ったように冴え冴えとなった。乱れ散った金髪が、細い首を包みこんでいる。私は愚かにも、ふと吸血鬼

の齒跡をそこに捜した。

「その男に会いにゆこう。俺はともかくそのくそつたれと結着をつけなきゃしょうがない」

「結着ってどうするのよ」

「殺すだろう、きつと」

私に人を殺せるわけなどなかったが、小心者ゆえに、見境もなく凶暴にも残虐にもなる自分を知っていた。男と会ってみたいという煤黒い氣持と押しとどめる自分が瞬間せめぎ合った。私が思い詰めた顔になったのを見てKは慌てた。

「まだ寝てるわ」

「寝てりゃあ起こせばいいだろう」

やりとりの滑稽さにKも私も氣づかず、私は勢いでダンスのうえにあつたバック・ナイフを握み、Kは腕にしがみついた。だが次第に芝居もどきになって、ばたばたと走ったり壁に肘を打ちつけたりしながら、

「ゆこう」

「やめて」

と繰りかえすうちに、男と会う気持はすっかり倦んでしまい、私は内心ほっとしながら頃合いを見計らってナイフを投げ出した。

Kは、ダンスに寄りかかった。

窓へ顔を振っている。しつとりと汗に塗れ、首筋に髪が絡んでいる。それが情事の痕跡のように思われ、罵倒する言葉を失って座りこんだ。

激情はおさまりそうもない。血が逆流してしまったようで、ほとんど前後不覚に陥っている。が、頭の隅に森と冷たく冴え切った領域がある。陰險な打算で多忙な領域がある。

別れてしまったほうがよいのではないか、男なら頬のひとつも張りとはして引導を渡すべきではないかと考えてみるが、力はない。別れるほどのことではないのだという思いが先に立つ。私への愛情が失せたとはどうしても思うことができない。昨日のKの素振りにしても、すべてが演技だったとは思われないのだ。

「あなたと一緒にいるとどんな子供みたいになってゆくのよね」と、Kは口を尖らせたことがある。「外で人に会っているときと全然違うの。あなたの前だときっとあなた好みにふるまっているのよ。でもどっちがほんとうのあたしなのか、わからなく